

主は生きておられる

大根田 恭子



左が恭子さん、左はお母様の杉山澄子さん

私は、一九五一年、父杉山澄と母杉山澄子の二女として茨城県水戸市に生まれました。三歳違いの姉は山口寿子姉妹、その夫である義兄は山口一郎兄弟です。父は、二〇〇四年に集会の兄弟の司式のもと、天の御国に召されました。現在は、鹿嶋集会に水戸在住の母と義兄、姉、そして私が集わせていただいています。

私はさしたる困難も経験せず成長しました。教員であつた父の仕事にあこがれ、自分も小学校の教員になろうと、そのことだけを大切に娘時代を過ごしてきたように思います。そして今思えば、何も分らない自己中心の女性のまま結婚生活をスタートさせたのだと思います。

主人のいとこに当たる人の紹介で、お見合い結婚をしました。主人は、大学の教員で指導と研究に当たる人というものでした。この条件は、当時の私にとって、とても好ましいものでした。教育の仕事は、私にとつ

てこの上もなく大切なこととして両手に握りしめていたからです。けれどもここから先、イエス様は大きな愛を持って私を叱り、たくさんのことを語ってくださいることになるのです。

大きな試練は、主人の転職と病氣を通してダイレクトに与えられました。

結婚して三年後、長女綾子が生まれました。長女の誕生で主人もとても喜んでいましたが、どこか不安そうな表情をするのが気になりました。数日後そのわけを聞くと、来年には大学を去らなければならないことを告げられました。主人は、この話は、私が無事に出産してから話そうとずっと考えていたとのことでした。それから職を求めて水戸から鹿嶋の地へ転居。長女が満一歳、二女聡子が三ヶ月後に年子で生まれるという頃でした。

「こんなはずではなかった!」

7人の証し

Unser HERR lebt

イエス様を知らない私は、心の中で主人を責め立て、主人を裁きました。主人が私の体のことを氣遣つてなかなか言い出せなかったことさえ、言葉通りに受け取れませんでした。自分のことしか考えられませんでした。さらに、新しい職場に就く直前、健康診断で主人の尿にたんぱくが出ていることがわかったのです。当初は用心していれば大丈夫ということでしたが、「悪化しないタイプの腎炎」という説がくつがえされ、透析への不安をかかえながらの毎日を送ることになってしまいました。

それから七年程たった頃でしょうか。私は子育て中にもかかわらず、また、主人の病氣のことも十分考慮せずに、好きな仕事への意欲が再燃し、部屋を借りて学習塾を開くという多忙な生活を選んでしまっていました。三十六歳の時でした。長女、次女、そしてこの仕事を始めて三年後に生まれた三女倫子たちの面倒を見ながら不器用な私が仕事をしていくのは、やはり大変

なことでした。主人が何でもやってくれるのをいいことにして、主人の協力をすっかり頼みにしてしまいました。

その結果、自分の仕事をフルにやって家族の世話をするという生活になった主人は、とうとう腹膜透析への道に追いやられることになってしまいました。粗末な食事、荒れた部屋、放りっぱなしの子供たち、主人の嘆きはいかほどだったことでしょう。

そして八年後のある日、主人の体と心のうつ積が堰を切ったように、どつとあふれ出てしまったのです。それは、夜間の腹膜透析がうまく行かず、その上、带状疱疹の治療で飲んだ薬の副作用が出て苦しみ始め、私の運転で急いで、水戸の病院に向かう車の中でのことでした。

主人は、もうろうとした状態の中で、ゆつくりと静かに、しかしはつきりと今までの私との結婚生活を悔

やんでいる、という話をし始めたのです。それは、まさに遺言のようでした。「洗濯なんか、したくなかった」と。

私は、狼狽しました。なぜなら、傲慢なことに、自分はいくやっている妻だ、とこの時まで思い込んでいたからです。よく、ハンマーで頭をたたかれたようだと言いますが、まさにその通りの衝撃でした。「白いものが見えてきた」などと言いながら眠り込んでしまう主人に、運転席から大声で名を呼びかけながら、なんとか水戸の病院にたどり着きました。長い長い一時間半でした。

入院二日目だったでしょうか。透析終了を待つ間、私は、主人の病室でぬけがらのようにベットにすわっていました。主人が吐いた必死の言葉から、自分がいかに自分勝手にひどい妻だったかを思い知らされ、絶望感でいっぱいになっていました。いっそ大洗の海に飛び込んでしまおうかとさえ思いました。

そのとき、明るい声とノックの音が入ってきました。誰だろうと顔を上げると、姉の寿子姉妹と、初めてお会いする集会の二人の兄弟方でした。三人ともはるばる東京から来てくれたのでした。

三人は、私の前で聖書のみことばを読み、祈りました。何と祈ってくださったのか、どんなみことばを示してくださったのか、今は思い出せないのですが、不思議なことに、私は直前に味わった絶望感から解き放たれ、すっかり元気になり、エプロンをかけていそいそと主人を看病する者へと変わっていたのでした。

そして、今までの自分を悔い改め、よい妻になろうと、立ち上がることができました。私がイエス様に出会ったのはその時だったと思っています。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのな
い者に悟りを与えます。
(詩篇 119:130)

7人の証し

Unser Herr lebt

このことが契機の一つとなって、吉祥寺集會に集っていた義兄の山口一郎兄弟と寿子姉妹が、一郎兄の父である吉佑兄と息子の泰史兄を伴って、私たちの住んでいる鹿嶋に住まいを移してくれたのです。

それからまもなく、一郎兄の家が、礼拝、家庭集會の場として用いられるようになりました。当初は皆で近くの集會に集わせていたのだと思っていたのですが、ベック兄が祈ってくださり、「一郎。ここには、一郎、寿子、吉佑お父様、泰史、そして神様とイエス様と聖靈様の七人がすでにおられるよ」とおっしゃってくださいました。鹿嶋集會が起こされた瞬間でした。一九九七年のことでした。

日曜礼拝、福音集會、記念会、葬儀、結婚式のたびに、吉祥寺、印旛、市川、日立集會の兄弟姉妹が集ってくださるようになり、お交わりも豊かに備えられました。私も鹿嶋集會に集うようになり、みことばの扉が開いていくのを覚えるようになりました。

主人は退院後、腹膜透析をやめ、血液透析に移行することになりました。折しも、その年に法律が改正されて、素人でも透析の針を指して、透析の介助者がいれば家で実施することができるようになりました。「よい妻になろう」という思いで、私は、在宅透析の^{せんし}穿刺、介助機械の管理を引き受ける決心をしました。病院と同じ透析装置が家に運ばれました。私が四十七歳、主人が五十三歳の時でした。

私は子供の頃から気が弱く、病院などで血を見ようものなら動転してしまう者でした。そんな私ですから、命の現場の恐怖感、不安感は一倍感強く、一日五時間、一日おきの透析介助の時間は緊張の連続でした。穿刺^{せんし}に失敗したりするとただうろたえ、患者である主人に逆に励まされて落ち着くようなことが続きました。

けれども主人からの励ましやアドバイスも、主人の血圧が下がって眠り込んでしまった時は、それを受けることができません。一人ぼっちの現場で、私はイエ

ス様に必死で祈りました。そして壁にかかっていたみことばをくり返しくり返し読みました。

恐れるな。わたしがあなたを^{あな}贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。

(イザヤ 43:1-2)

こうして、みことばに支えられる毎日が続きました。が、私はまだ、「よい妻」にならなくては、という思いから、自分の力で頑張ることから抜けることができませんでした。仕事はやめていましたが、体は疲れるばかり、うまくできるようなったかと思うと、またすぐにできなくなりました。

そんな私の姿をご覧になっていたベック兄が、メッ

セージの途中、席にいる私の方を向いて、茶目つ氣たつぷりの笑顔で「恭子、いい奥さんになんかならなくていいんだよ」とおっしゃいました。私は、はっとしました。その言葉に、ぴんと張りつめたものがゆるみ、何か温かく平安な気持ちに満たされました。すぐに、ベック兄がイエス様のみこころを伝えてくださったのだとわかりました。私は「私自身は、どのような努力や訓練を重ねてもよい妻には変われません。でも、だめな私を導いて下さる最良の牧者であるイエス様がいます。どのような時にも決して見捨てずに導いてくださるイエス様に感謝します」と祈りました。

しだいに肩の力を抜いて主人に寄り添って歩む者に変えられました。

さらにイエス様は、私の内側に光を当て続けてくださいました。日の光が当たった所に想像できなかったほどのちりが浮いているのが見えるように、私のわがままという罪をはっきり見せてくださいました。

「ああ、この罪が深くて主人や周りの人たちを傷つけてしまっていたのですね。イエス様、ごめんなさい」。心からの悔い改めの気持ちが湧いてきた時、イエス様は、十字架のあがないの意味をはっきりと示してくださいました。そうでした。私の罪のために、イエス様はあのむごたらしい十字架にかかってくださったのです。今までも、今も、そしてこれからも犯すであろう私の罪をすべて赦^{ゆる}してください、その罪をイエス様が身に背負ってくださいだったのでした。イエス様、ありがとうございます。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。

(イザヤ 38:17)

自宅での透析開始からほぼ二十年、私の手を取り足

を整え、時には背負って、イエス様は、どんな時も見捨てることなく私を導いてくださいました。

日々の透析治療での困難が押し寄せてきても、それは祈りに変えられ、びつたりのみことばが示されてすぐに平安に導かれました。本当に感謝でした。

主人にもこの喜びと希望を、と祈って交わりを求めましたが、私が思えば思うほど難しいことでした。一時は攻撃的になり、壁にかけたみことばの額やカレンダーを全部はずすように言われたこともあります。私は、主人がイエス様を受け入れないことで胸つぶれる思いを重ねましたが、このことも、自分の肉の力で成し遂げようとしていることに気づき、悔い改めました。イエス様が最善の時にそれを成してくださいさることを信じようと思いました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

(使徒 16:31)

二〇一七年五月のことでした。ついに自宅での透析を断念する時がきました。透析中に主人が胸の痛みを訴えたのです。すぐに透析を中断して救急車で主人を病院に運んでいただきました。

この時のことは、今でも落ち着いて話をすることができます。イエス様がずっとそばにいてくださり、私はいつでも平安だったからです。

その後、イエス様は、新たにたくさん恵みを与えてくださり、自宅近くの病院での透析、東京の病院でのバイパス手術へと導いてくださいました。お医者様や看護士さん、技師の方など温かいスタッフに見守られて、週三回の病院透析が続行されました。たくさんの兄弟姉妹のお祈りとお交わりに心から感謝申し上げます。

その間のことでした。病院の透析から帰宅した主人の穿刺部から血が吹き出しているのを見つけました。テープをはりかえながら「家庭透析をやっていた頃の

ことを思い出すね」と言うと、しみじみとした声で「長いことよくやってくれたね」と、心からの感謝の言葉を伝えてくれました。

二十年前、この言葉がほしくて、ほしくて走り回った私でした。やはり嬉しさが込み上げてきましたが、今は、そんな言葉はどうでもよく、ただなすべきことをしたまま、とイエス様の導きに感謝いたしました。願うことは、ただ一つ。一緒にイエス様を仰ぎ、永遠のいのちをいただくことでした。

二〇一八年九月早朝、主人は入院先の東京の病院から、めずらしく電話をかけてきました。術後一年たった検査入院の時でした。検査の結果は決して思わしいものではありませんでしたから、何事があったのかと一瞬緊張が走りました。でも、それは私にとって何よりも嬉しい知らせでした。主人は興奮気味に、「病室にあったみことばの小冊子を読んだよ」と、それだけを

私に伝えてくれたのでした。今まで長い間、決して自分から手に取るものなかったみことばの冊子でした。

お医者様の説明で絶望感でいっぱいになっていた主人に明りを灯してくれたのは、あんなに拒んでいたイエス様の光でした。

同年十月二十一日、主人は、ついに、二十二年の時を経て鹿嶋集会へと足を運ぶことができました。あつけないとられるほど自然な動きでした。私の勧誘も、周りの勧めのことばも、全くといっていいほど要らない主人の行動でした。心から主イエス様に感謝です。

さかのぼってそのちょうど二か月前の八月二十一日、私は吉祥寺集会での証しで、主人と一緒にイエス様を仰ぎ、共に永遠のいのちをいただきたいと壇上で叫びました。

「今日は日曜日、そろそろ礼拝に行こうか。何は忘れても聖書は忘れるなよ」と主人が言って、「はい。お料理を持って」と私が答える光景が来ますように、とも。

その叫びと祈りが本当になりました。

「主は生きておられる」。このみことばが、私の心からの証しのことばになりました。

最後に、みことばを記してこの拙い証しを終わらせていただきます。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてく

ださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。

(詩篇 103・2～5)

イエス様、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

大根田 恭子 (おおねだきょうこ)

一九五一年 茨城県水戸市生まれ 常磐小学校、茨城

大学付属中、水戸第二高校、茨城大学教育学卒

新治郡新治小学校、水戸市立石小川小学校勤務

(一九七九年退職)、公文鉢形教室運営(一九八六～九八年)

夫 愼 (ゆたか)

長女 綾子

次女 聡子

三女 倫子 (みちこ)

神のなさることは、すべて時に

かなって美しい

大森 孝志



一番右が大森さん、岡本さん、ベックさんと

私は、一九五七年に東京都文京区で生まれました。

家族は両親と姉と妹の五人家族でした。父は伯父と一緒に家業である写真製版業を営んでいました。伯父宅は事務所兼工場で、祖父母も一緒に暮らしていたので、父の実家と同様な感覚でした。父は仕事が忙しく、夕食もほぼ毎日伯父宅で済ませ、自宅に戻るのは夜遅く、顔を合わせるの朝だけになることが多くありました。ほとんど母子家庭の状態といってもよかったです。ほとんど母は寂しさを紛らわすためか、百貨店へよく買い物に出かけていました。小さな私はいやいやついて行くのですが、母が目を離れた隙に、離れてしまい、迷子になってしまうことがたびたびありました。幼少時は落ち着きがなく、じっとしていることが出来ず、母は病気ではないかと心配したようです。お灸は効果があると聞いて、灸治療を受けさせられたりもしました。

両親の親族にはクリスチャンがいなかったため、イ

エス様との接点はほとんどありませんでした。しかし、通っていた幼稚園がキリスト教保育を行なっていたため、知らず知らずのうちに福音の種が心の中にまかれていたのかもしれない。

神の国は、人が地に種を蒔く^まようなもので、夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実がはいります。実が熟すると、人はすぐにかまを入れます。収穫の時が来たからです。

(マルコ 4:26-29)

両親は教育熱心で、小学校高学年になると家庭教師が付くようになりました。しかし、じつとしていることが出来なかったので、勉強に身が入らず、家庭教師の手を焼かし、何人も替わったことを記憶していま

す。中学校では次第に落ち着きましたが、勉強は苦手で、成績はなかなか伸びませんでした。また、反抗期も始まり、自分の部屋に閉じこもることが多くなり、親とのコミュニケーションを取ることが難しくなっていました。中学三年生一学期の時には成績が更に悪くなり、担任の教師からは志望校にはどこにもいけないとさじを投げられてしまいました。親孝行を志すようにと願いをこめてつけられた孝志という名前でしたが、まったくの親不孝者でした。

あなたの父と母を喜ばせ、あなたを産んだ母を楽しませよ。わが子よ。あなたの心をわたしに向けよ。あなたの目は、わたしの道を見守れ。(箴言 23:25、26)

もう後がない中、一念^{いちねん}発起^{はつし}して、勉強に集中しました。その甲斐があったのか、奇跡的に大学の付属高校に入ることができました。しかし、高校に入ってから

も、相変わらず勉強嫌いで、真面目に勉強することなく、同級生との遊びに夢中でした。そんな状態であったので、高校での成績も悪く、特に英語は大の苦手で、赤点を取ったことが何度もありました。しかし、落第だけは免れ、エスカレーターで大学に進学し、何とか理工学部資源工学科に入学できました。大学では勉強してこなかった付けで、教養の成績は惨憺^{さんたん}たるものでした。専門は興味のあるものもあり、特に当時の石油埋蔵量から、石油がなくなったらどうなるのだろうかとかと真剣に考えた時期もありました。大学在学中は、知らない土地を旅することに夢中になり、日本各地をはじめ、アメリカ、カナダ、ヨーロッパなどを旅しました。大学院へも進学しましたが、研究よりも旅行や遊びに費やす時間の方が多かったような気がします。そのような不真面目な学生生活を送っていましたが、修士号を取得後、一九八二年に水処理プラントのエンジニアリング会社に就職しました。就職してもイエス様のこ

とを知らず、自宅から通い、自分勝手に放蕩の限りを尽くしていました。しかしある時、最寄りの地下鉄の駅にある教会の講演会のポスターに目が留まり、初めて教会に足を踏み入れることになりました。電車の飛び込み自殺^{みすい}未遂^{みすい}で、両足、片手を失ったにもかかわらず、後にイエス様と出会って救われ、牧師と結婚し、日本中を伝道していた田原米子さんが講演者でした。その時、なぜ教会に足が向いたのかよく覚えていませんが、不自由な体になっても喜びにあふれてイエス様を証しているのが心に残りました。その時に、第二の福音の種がまかれたのかも知れません。しかし、しばらくの間、芽が出ることはありませんでした。

御国のことばを聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪って行きます。道ばたに蒔かれるとは、このような人のことです。

(マタイ 13:19)

独身生活を謳歌^{おうち}していましたが、三十歳を境に結婚に対する意識が変わってきました。いい人がいたら結婚したいと思い始めましたが、相手を見つけることから始めなければなりませんでした。その時、漠然とではありますが、進学の時、就職の時にも、何か運命的なものを感じていましたので、結婚も自分には赤い糸で結ばれた運命の人がいると思っていました。両親の勧めで、コンピューターお見合いのクラブに入会し、今で言う婚活を開始しました。この人と結婚したいという女性に出会いましたが、相手は余り気乗りしないのか、お付き合いはなかなか前に進みませんでした。しかし、ある偶然から結婚話がとんとん拍子に進み、半年余りでゴールインしました。いろいろな紆余曲折^{よきとせつ}を経て、結婚に導かれた女性が今の妻です。

それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。
(創世記 2・24)

らやましく感じました。それに反して、私の家族は、同じ屋根の下で、お互いあまり干渉せず、よく言えば自立し、悪く言えば自分勝手に暮らしていました。それは人間的には楽ですが、何か冷たい関係でした。それに反し、妻の家族は温かみにあふれていました。妻は自分がないものを持っていてと強く感じました。そこに大きな魅力を感じ、強く惹^ひかれました。性格も大きく違っていました。妻は細かいことにはこだわらないタイプですが、逆に私は細かいことにこだわるタイプでした。典型的なのが、旅行に行く時でした。私は決められたとおり、目的地に時間通りに着くことを大切にしましたが、妻は目的地までの間に寄り道をし、想定外のことに遭遇することを楽しみにしていました。性格も価値観も違う二人が一緒に暮らすわけですから、夫婦生活がうまく行くはずがありません。唯一似ている性格がお互い負けず嫌いのところですが、この性格が火に油を注ぐことになります。

一九九〇年に私たち夫婦が結婚した時には、お互いイエス様のことをまったく知りませんでした。しかし結婚を境にイエス様に次第に近づくことになりました。それは喜びで満たされるはずの結婚生活が、予想に反して徐々に苦しみで満たされることになったからです。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。
私はそれであなたのおきてを学びました。

(詩篇 119・71)

まず育った環境が全く違いました。妻の家族は両親、妹の四人家族でしたが、両親は自営業で仕事も遊ぶのもいつも一緒でした。家族が皆仲良しで、何でも話し合える関係でした。自分が感じたことを正直に口に出せる。不満があれば、我慢せずに相手に伝える。うれしいこと、悲しいこと、苦しいこと、泣きたいことがあれば口に出し、共感しあえる。そのような家族関係をう

すっかりした妻をだれが見つけることができよう。彼女の値うちは真珠よりもはるかに尊い。(箴言 31・10)

私たち夫婦に転機が訪れたのは、結婚して二年後の一九九一年の冬のことでした。当時、私の仕事は半導体工場で使われる純度の限りなく高い水を作る超純水装置の設計でした。日本の大手半導体メーカーは、当時生産拠点を海外に移し始めており、新しい半導体工場が東南アジア、アメリカ、ヨーロッパといった世界各地に建設されていました。私たちの会社は、国内でのビジネスがほとんどでしたが、お客様の海外進出で、海外でのビジネスを真剣に考えざるを得なくなっていました。会社から、アメリカにおけるビジネスの可能性について、一人で調査してくれないかといわれた時、妻は妊娠六か月でした。海外で乳児を連れた生活がどんなに大変かは想像が付き、受けるべきか、断るべきか悩みました。しかし、運良く、赴任先のロサンゼルス

には妻の高校時代の友人が住んでおり、いろいろと助けてもらえるとのこと、駐在を受け入れました。翌年長男が誕生してからわずか三か月後に、アメリカに単身で渡りました。右も左も分からない上に、苦手な英語もままならない状態で、ワンマンオフィスを開設し、アメリカでの仕事を開始しました。ともかく、アメリカは広く、ロサンゼルスとニューヨークは、飛行機で五時間、時差が三時間あり、移動で一日が終わってしまう所です。この地を一人で調査するのかと思うと途方に暮れたこともありました。半年後に妻と長男が合流し、家族の世話と仕事を両立させなければならず、忙しい日が続きました。また、広いアメリカでの情報収集では、どうしても出張が多くなり、子育ての負担は妻に重くのしかかっていきました。夫婦の会話は少なくなり、妻のイライラは募り、仕事と家庭を巡って、夫婦喧嘩が絶えないようになりました。アメリカに出发する前に第三の福音の種がまかれていたのですが、

そのことは後になって知らされました。吉祥寺キリスト集会に集われている岡本雅文さんは新入社員の時に所属した卓球部の先輩でした。岡本さんはアメリカ駐在が決まった時に、キリスト集会の冊子を私に渡してくれたそうですが、その時は興味がなく、引越荷物に埋もれ、忘れてしまいました。渡米後、妻が引越荷物を整理している時に見つけたのですが、変な宗教の本と思い、残念ながら処分してしまったそうです。しかし、それから十七年後にイエス様の導きでキリスト集会とのつながりができることになります。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1 コリント 10:13)

ロサンゼルスで二年半が過ぎ、夫婦関係が最悪の頃、テキサス州ダラスの日米半導体メーカーの合併会社から奇跡的に超純水装置の受注に成功しました。受注後は設計担当者として仕事をするために、一九九五年にダラスに転勤することになりました。妻にとってダラスは見たことも聞いたこともない土地だったので、ここでの生活はロサンゼルス以上に大変なものになると思ったようです。不安を抱えたダラスへの引越でしたが、そこにはイエス様の大きなご計画がありました。ダラスに移って間もなく、隣人のアメリカ人が自分の職場の日本人を紹介してくれました。ダラスは、宗教都市と言っても過言でなく、いろいろな宗派の教会が建ち並んでいます。多くの人々は、クリスマスであり、日曜日には礼拝に行く光景があちこちで見られました。また私たちに良くしてくれた別の家族も熱心なクリスチャンであり、毎日曜日礼拝を守っていました。私たち夫婦はそれまでキリスト教には縁

がなく、教会に行ったことも、聖書を読んだこともありませんでした。しかし、妻は家庭集会に参加しているうちに、礼拝にも参加するようになりました。私も妻と一緒に家庭集会に参加するようになりました。過去に蒔かれた福音の種が芽を出そうとしていました。決心したのは初めての夕方の礼拝の時でした。それ以前に妻はすでにイエス様を信じる決心をしており、私にクリスチャンになって欲しいと思っていたことは分かっていました。私を導いてくれたのは、その時日本から伝道旅行に来ていた牧師でした。彼と話しているうちに、順風満帆のように思っていた自分の人生が、実は広い海の上にぽっかり浮かんだ方向の定まらない舟のような気がしました。それは何の土台もなく、大波が来たらすぐに流され、崩れてしまう人生であることに気付いたのです。また、不安で寂しい駐在生活を送る妻に寄り添うこともせず、自分勝手に生きてきた自分の罪深さを思い知らされました。そして、こんな

どうしようもない私の罪のために十字架で死んでくださったイエス様を自分の救い主として受け入れ、これからの人生を夫婦そろってイエス様にゆだねて歩むことを決心しました。

(ガラテヤ 2:20)

また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。

(マタイ 7:26-27)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

こうして離婚の危機にあった私たち夫婦が、導かれるままに、教会に行き、そしてバプテスマを受けるまで、半年も経ちませんでした。結婚し、子供を授かり、アメリカに渡り、夫婦喧嘩の末に、イエス様を信じ、バプテスマを受け、クリスチャンとして生まれ変わったのも、すべてイエス様の憐れみでした。一回目のアメリカ駐在から帰国した一九九六年冬に長女が生まれ、日本での家族四人の生活が始まりました。帰国後も海外出張が多く、子育ては家内に任せきりでした。また、アメリカと日本では住宅環境が大きく違い、家族四人で生活することで大きなストレスを抱えることになりました。しかし、救われる前とは違い、クリスチャン夫婦として、新たに教会に集い、共に歩むことができるようになりました。五年後の二〇〇一年、再度アメリカに駐在することになりました。今度はアメリカの子会

社の代表者という責任ある立場で赴任することになり、家族四人全員で一緒に渡米しました。子供たちはローカル(地元)の学校に通い、英語で苦労しましたが、やがてバイリンガルになりました。二回目のアメリカ駐在は十一年間の長きにわたることになりましたが、その中で大きな喜びは、長男と長女が小学生の時に救われたことでした。小さいながらもイエス様を救い主として受け入れ、二度のアメリカ駐在の間に家族全員が救われることができました。すべてはイエス様のご計画でした。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
(使徒 16:31)

キリスト集会との出会いは、二〇〇九年いろいろな事情で日本語教会を出た後、ダラスの自宅で家庭集会を開いていて、そこに集っておられた女性が、キリ

スト集会の証し集「光よあれ」を持ってこられたのがきっかけでした。その中に家庭集会のリストが載っていて、そこに岡本さんの名前を見つけ、会社の先輩とあって連絡を取ったところ、そうだという事で、イエス様を通してキリスト集会とのつながりができました。その後ダラスにも集会の兄弟姉妹がおられる事が分かり、アメリカやヨーロッパにおられる集会の方々が電話回線を通して集う電話礼拝にも参加するようになりました。

その後、二〇一二年の帰国後は吉祥寺集会に集っていましたが、二〇一四年二月に府中近辺の兄弟方との祈り会で中国地方の集会の兄弟がもつと与えられるようにと祈ったところ、一週間後に山口への転勤命令が出て、イエス様のなさることに驚きました。二〇一五年に妻と長女が帰国してからは宇部市に自宅が与えられ、終の棲家になりました。現在集っている山口集会は、毎回十名程度が集う小さな群れですが、イエス様

主が私にしてくださった大きなこと

大森 美樹



左から美樹さん、長男の泉輝さんと沙耶さんご夫妻、孝志さん、長女の愛実さん

が真ん中におられ、喜びがあふれています。この世のすべてを創造された全能の神様が、このようなちに過ぎない小さな者にも目を留めてくださり、イエス様を通して今日まで導き、支えてくださったことに心より感謝しています。もし、夫婦そろって救われることがなかったら、今の私はないと思います。私の人生は神様からいただいたジグソーパズルのような気がします。今もこれからも、私の身に起こることがどんなことであっても、パズルの一片であり、それを一片ずつそろえることで神様からいただいた素晴らしい人生を完成させることができると考えています。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちにすぎないことを心に留めておられる。
(詩篇 103:2、14)

大森孝志(おもりたかし)

一九五七年 東京都文京区生まれ 彰栄幼稚園、明化小学校、茗台^{めいだい}中学校、早稲田大学高等学院、早稲田大学理工学部、早稲田大学大学院修士課程卒、栗田工業(株)勤務、二〇一九年退職

妻 美樹(みき)

長男 泉輝(みずき)

長女 愛実(まなみ)

私は、一九六二年、東京で生まれました。家族は両親と五歳下の妹と四人家族でした。母は、私がまだ幼少の頃、近所のクリスチャンの方に誘われて、教会へ何度か行っていました。字も読めないほど幼い私でしたが、母が、礼拝中耳元で「美樹ちゃん、イエス様を信じると、なんでも願いがかなうんだって」と言ってくれたので、その時、暗い天井を見つめて、「イエス様を信じます。みんなとお歌を歌えるようにしてください」と祈ったことを、アメリカで洗礼を受けた直後に思い出しました。

その後、父の転勤が多かったこともあり、教会からはすっかり遠のいてしまいました。母もイエス様を信じるまではいかなかったようです。子どもの頃に読んだ絵本の中の、イエス様とお話しているマリアの表情と十字架にかけられたイエス様の姿が、当時の郷愁とともに今でもよみがえってきます。

結婚してからイエス様に出会えたことは、イエス様

が、あの時の私のような者の小さな祈りを覚えていてくださったのかもしれませんが。

はじめに、両親の救いについてお話しいたします。

「あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい。」

(マルコ 5:19)

このみことばは、結婚後一度目のアメリカ・ロサンゼルス駐在とその後テキサスへの転勤を終えて、救われたばかりの私に与えられた聖句です。みことばのとおり、日本に帰国後、二度目のアメリカ駐在の辞令が下りるまでの四年間に父と母が救われました。

父は小さな会社を経営していて、母が会計をしていました。救われて間もない私は、両親にイエス様を信じてもらいたくて、一生懸命に教会で教えていただい

たことを伝えました。最初から「イエス様を信じると天国に行くことが約束されるが、そうでないと地獄に行くことになる」と両親に言うこともあり強い勧め方をしてしまったので、両親は反発し警戒してしまいました。その後、会うたびに五分だけお願いしてやっと聖書を読ませてもらうという状況に変えられました。

母はクリスチャンになれない理由を三つ挙げていました。「会社を経営していたら教会なんか行っている暇がない。長男の嫁としての務めがある。神社の行事のコミユニティの一員としての役割が出来なくなってしまう」ところがその後、会社経営は思わしくなくなり、三つの理由がほとんど主によって取り去られました。母にとって大変厳しい出来事でしたが、主の大きな恵みだったと思います。救われた母は、後に教会で皆勤賞をいただくほど熱心に通うようになりました。

父はその当時ビジネスに疲れていました。また、大

好きな初孫と離れてしまうことになるという大きな悲しみの中で、主を本当に必要としていたと思います。私は二人目の子供を身ごもり一時帰国していて、数日後にはまた戻らなければならないという時でした。夫に突然日本への帰国命令が出て、私は日本にとどまる事が許されたのです。この時もイエス様が強く働いてくださったと思います。アメリカでの出産に不安を感じていた私はもちろんのこと、父は本当に嬉しかったと思います。おそらくこの時イエス様と、父の出会いがあったのではないでしょう。実は、その後実家に残しておいた聖書の「箴言」を父が読んでいた事の後になって知りました。

四年後、長男が七歳、長女が四歳の時、二度目のアメリカ赴任が決まりました。アメリカに出发する前に両親が教会でイエス様を受け入れたのは、私が伝道したからではなく、主が働いてくださったからです。

父はそのあと心筋梗塞で亡くなりましたが、父の死

に顔はまるで笑っているようで、イエス様にお会いしているように思えました。お葬式では、主を信じたものとして親戚に証しできました。このことを通して、主がどんなに大きな事を私たち家族にしてくださったか知ることになりました。また、母が一人で新しく生活するまでの壮絶な出来事も、そのすべてが主のタイミングによって進められ、恵みにあふれた主の備えが用意されていました。

主そのとき、あなたが呼ぶと、主は答え、あなたが叫ぶと、「私はここにいる。」と仰せられる。

(イザヤ 58:9)

私の救いについてお話しします。私は、結婚、子育ての中での試練を通して、夫と一緒に救われました。

私は子供の頃、父の転勤のため幼稚園や学校が何度も変わりました。行く先々で孤独感を味わってしまし

たが、家族でよくピクニックや遊園地に出かけ楽しく生活していた事と、根が明るい性格もあり活発で好奇心旺盛な子供時代を過ごしました。バブル時期に贅沢な独身時代を謳歌し、華やかなアメリカに憧れ、「結婚して生活をするならアメリカがいい」と願っていました。そして、なかなか結婚しない私を心配した父に勧められるままに、結婚クラブに入会することになりました。シートに希望する条件を書き込むと、お見合

いが設定される仕組みです。結婚相手は「三高」(高学歴・高収入・高身長)と言われていた時で、私もお相手は、そのような人を求め、条件としていました。そんな時、夫に出会い、父が「この男性なら間違いはない」ととても信頼した様子でした。私は初めは乗り気ではありませんでしたが、だんだん「この人は絶対アメリカに行く」という気がしてきて、結婚のお話が進んでいきました。さらに付け加えて、「アメリカでは社長になる」とアメリカ駐在の辞令が下りる前にそんな予感がしてい

たのでとても不思議です。今振り返ると人間的な欲望に満ちたものです。それが全て実現しました。でも、私が求めた条件では幸せになれない事を思い知らされることとなりました。

主は与え、主は取られる。

(ヨブ 1:21)

主のなさることには意味があります。

アメリカに駐在して一年目、主人が「社長になる」ことを除いて願いがすべて実現した時、日本ではバブルの崩壊、アメリカは以前の輝きを失い、ロサンゼルスでは暴動や大地震。外出禁止令が出て外にも出られず、夫は長期出張。また子供の誘拐や日本人をターゲットにしたギャングの横行。初めての子育てでしたし、頼る人もなく精神的に最悪の状態でした。不安とストレスから、死んだ母方の祖父(商人でカリスマ的人格者)の位牌を作り、それに守ってくれるように祈りました。

夫の方は、「一人で成果を上げなくては」と必死だった

のでしょう。私の気持ちを汲み取ることはできませんでした。もう、夫婦として限界では、と思った矢先にテキサスへの転勤が決まりました。死んだつもりでなければとても行けないと思いました。テキサスが位置する中西部はバイブルベルトと言われるほど、多くの人が教会にいき、町の主要道路の両側には大きな教会が沢山立ち並んでいました。隣人が日本人を紹介してくださり、その方々が熱心なクリスチャンだったので、教会へ行つて聖書を学ぶことになりました。目的は学びの時に子供を預かってくださるからでした。少しの時間でもいいから安心して一人になりたかったのです。アメリカでは、毎日のように広告の裏には誘拐され消息不明の子供の写真が印刷されているほどでしたから、どこへ行つても気が抜けませんでした。

初めて聖書を読み始めた頃、ページを開くと決まつて偶像礼拝という文字が目につきました。

牧師に「偶像礼拝って何ですか?」とお尋ねすると、

本当の神ではないものを頼り、拜むことであり、また、すでに死んでしまった祖父という人間を頼りにすることともそうであると教えられました。確かに祖父の霊があるのか、またどんな力を持っているのかも疑問でした。これらは、私がそう思うだけのことであって、根拠がありませんでした。今にして思えば、「聖書はなんと言っているのか」という視点に欠けています。愚かにも「私はこう思う」のほうが大事だったのです。

ですから、私の愛する者たちよ。偶像礼拝を避けなさい。
(1コリント 10:14)

でも、なぜ唯一という神の存在を信じることができず、のかわかりませんでした。心の支えは人それぞれであつて良いのではないかと思っていました。また、なぜ彼らが、聖書に書かれていることがすべて正しくて

他が間違いないのか、また人に信仰を広めようとするのかわかりませんでした。ただ、クリスチャンの交わりの中に入れてもらえることは、アメリカ駐在生活の中で大変有難いことでした。それでも、夫の態度や言葉が無関心に思えて苦しんだり、時には絶望的になったり、とてもヒステリックな言葉を夫に投げつけるようになっていました。この時私は、危険なことから守ってくれる存在を必要としていました。子育ての荷を少しでも下ろせるところがほしかったのです。

そのような時、教会のメンバーが全員で私のために祈ってくれました。その場で不思議な涙が溢れてきました。悲しくも嬉しくないのに、心も動いていないのに涙が止まりませんでした。その次の日曜礼拝でイエス様からの救いを信じ受け入れました。どうしてなのかわからないけど、この方こそ今まで私が求めていたものだと思えました。

「イエス様はあなたのそばにおられる」との牧師の

メッセージが心に残りました。後で「これだ」ということが与えられました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。

(イザヤ 41:10)

私は孤独だったのだと思いました。自分中心だから孤独なのだと悟りました。また、不安でたまらないのだと思いました。

主はすべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。(詩篇 121:8)

また、夫が仕事優先で会話のない状況について、牧師から日本人は仕事で宗教になっている状況がありがちなのを指摘され、「会社が変わるためには、トップが

変わる必要がある」と言われ、アメリカ駐在での日本企業の経営責任を負わされている方々の救いについて毎週祈禱会で祈りました。「一人でも多く企業のトップにクリスチャンが与えられ、家族を大切にすることが優先されますように」と祈りました。その後、聖書を読むことが楽しく、主の偉大な言葉に心から感動しました。

生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。(1ペテロ 2:2)

教会で箴言の学びが始まり一節ごとにとっても心に響きました。

主を恐れることは知識の初めである。

(箴言 1:7)

それまで、私がどんなに自分勝手な生き方をしていたかが、よくわかりました。それまでの生き方が反転する体験でした。今まで味わったことのない心の安らぎを知りました。イエス様が私の心の支えとなったからです。

そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。(ヒリピ 4:7)

また、多くの罪を示されました。夫に対していつも責めてばかりいたからです。

さばいてはいけません。さばかれないためです。

また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。

(マタイ 7:1、3)

私は言った。私は自分の道に気をつけよう。私が舌で罪を犯さないために。
(詩篇 39・1)

今まで夫にも子供にも、ヒステリックな態度をとった事に、心からごめんなさいと謝りました。イエス様にも謝りました。私の態度も心も変わっていく中で、夫も救われ、ともに洗礼を受けました。

主を知ってから、人が変わったようになりました。常にみことばが浮かび、人と接する時、心と言葉に気をつけるように心がけました。みことばに従いたかったからです。「良い母親になりたいと願い、良い妻になりたい」と祈りました。でもいろいろ頑張っていたのですが、長男の幼稚園の運動会で下の子が行方不明になり、見つけてくださった方に「母親失格」と言われたことで、いかに自分が良い母親とはほど遠い者か、このような者をも主があわれんでくださり、愛してくださっていることを知りました。また外ではなんとか気

をつけていられるつもりでも、家庭の中では、言うことを聞かない子供のことや、相変わらず無関心な夫に感情をコントロールできない苦しみがありました。みことばに従えない事がとても辛くなりました。家族に苦しみを与えてしまうことに心が引き裂かれる思いです。でも自分ではどうにもできませんでした。その中で夫はアメリカの経営責任者として、二度目のテキサス赴任が決まりました。祈りに答えられた主は夫をお遣わしになりました。同時に結婚前の願いもかなったのです。夫婦の危機にあった私は、次のみことばを主の命令として与えられました。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。
(エペソ 5・22)

二〇〇二年から二〇一三年まで、神様の前に静まり、示されたみことばや祈りを書き留めたデボーション用

のノートが十五冊残っています。ノートには、イエス様への感謝と主の導き、そして慰めのみことばが溢れています。また、たくさんのおしゃべりと自分の怒りを抑えられない苦しみと悔い改めが繰り返されている様子が書かれています。このことは、いつも、私自身の感情が高ぶりコントロールできない敗北の結果です。救われる以前からもっている生まれながらの性質です。

主よ。今、私は何を待ち望みましょう。私の望み、それはあなたです。私のすべてのそむきの罪から私を助け出してください。
(詩篇 39・7・8)

全くどうしようもない私に主が語りかけてくださいます。
「子よ。あなたの罪は赦されました。」
(マルコ 2・5)

あの十字架上での主の贖いのみわざは私の身代わりだったのです。そして主は今も生きておられます。

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。
(ローマ 4・25)

主は生きておられる。
(2サムエル 4・9)

私たち夫婦は、もうお手上げという状況になったときに、いつも主の奇跡を経験します。
「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」
(ヨハネ 11・40)

私は自分の思いで求めた条件をすべて整えた結婚相

手を与えられましたが、その条件はそれによりむしろ苦しむ結果になったり、消えてしまったり、夫との結婚生活で絶望することにより、主により頼むことを教えていただきました。夫や子供が思い通りにならないことに憤^{いらだ}つていた私は、自分さえ自分の思い通りにならないまったくみじめな存在だと気付きました。そんな者に主はあわれみを注いでくださったのです。信じがたいことに、永遠になくならない命をも与えてくださったのです。最近与えられたみことばです。

あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。
(ヤコブ 4・9)

しかし私たちがまだ罪人であつたとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私

たちが、彼によつて神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。
(ローマ 5・8-9)

この方以外には、だれによつても救いはありません。
(使徒 4・12)

苦しみ、悲しみ、それらはやがて祝福に変えられます。それから二十四年後になる二〇一七年の夫の六十歳の誕生日に赤いベストを編んでプレゼントしました。結婚する前の約束だったからです。このことも主のご計画を感じます。夫の還暦にあげる約束をしていたこの赤のベストは、もしイエス様に会っていないなかったら、編むこともなかったでしょう。

アメリカでの教会生活を続けて行くうちに、「本当の礼拝」、「本当の信仰」とはどのようなものがわからなくなってきました。そのような中、主からみこと

望むことが希望となりました。

生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙^{いっきょ}に引き上げられ空中で主と会うのです。
(1テサロニケ 4・17)

アメリカから帰国した現在、長男も、長女も別々に住んでいます。小学校の時に信仰を与えられていて、それぞれ大人としての新しい一步を踏み出しました。私たち夫婦はそろつて山口キリスト教会で礼拝を守らせていただいています。夫はメッセージのご奉仕もさせていただくようになりました。これから定年を迎えた夫婦としての生活になりますが、主に仕えるように夫にも仕えて行きたいと願っています。

…食事のもてなしをし、全家族そろつて神を信じたことを心から喜んだ。
(使徒 16・34)

ばを頂き、祈つた結果、三年という月日がかかりましたが、教会から距離を置くことになりました。その後キリスト集会を知ることとなり、そこでの学びや体験を通して、私なりの答えを見つけることが出来ました。本当の礼拝は、心を込めてイエス様に感謝をささげること。心を込めて賛美をささげること。本当の信仰とは、現状が厳しい時こそ、その先に必ずある、主の助けを信じることだと思いました。

主は神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことにさよつて礼拝しなければなりません。(ヨハネ 4・24)
主は信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。
(ヘブル 11・1)

また、携^{けい}拳^{けん}ということも、キリスト集会で知ることができました。主に引き上げられることを心から待ち

この証しを書かせていただくことになってから久しぶりにデポジションノートを読み返して思うことは、これまでの歩みは主がずっと一緒にいてくださったということです。不安を消してくださるみことばが、沢山与えられました。奇跡のような恵みは数知れません。これらすべては、私にとって主がしてくださった、どんなに素晴らしい大きなことか、と改めて思います。生きて働いておられる、主が共におられる、これは本当のことです。こんな私をお見捨てにならず愛してくださいます。これからも次のみことばを信じて歩んで行きたいと思っています。主にご栄光がありますように、みこころがなりますように祈ります。

平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨の時、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。あなた方

を召された方は真実ですから、きっとそのことをしてくださいます。

(1テサロニケ 5:23-24)

最後になりますが、幼い頃イエス様を信じた後、私のほうは全く忘れていたにもかかわらず、主は私のことをずっと覚えていてくださいました。なぜなら、中学三年生で関西から東京に転校した時、美術の先生に「自由に書いて」と言われて制作した版画があるのですが、救われて帰国した時、実家の棚から落ちてきました。後から考えると、ぴったりのみことばが彫ってありました。

見よ。わたしは、戸の外に立つてたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいつて、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

(黙示 3:20)

大森 美樹（おおもりみき）

一九六二年 東京都生まれ 東京女子体育大学体育学部卒、東京都障害者スポーツセンター勤務

夫 孝志（たかし）

長男 泉輝（みずき）

長女 愛実（まなみ）



キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

【電話】0422-21-8450 (集会所)
東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

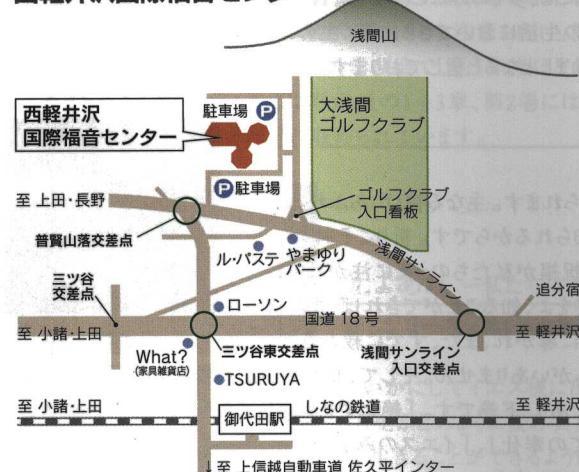
子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
【電話】0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
【電話】0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

アクセス

【鉄道】
しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで約5分(1000円程度)
徒歩約45分=3Km
御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】

上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分(約7km)
■周辺の道路に車を駐車させることは
禁止されていますので、厳重に
お守りください。

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。

あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現われています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒とすることができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと—ヨハネの黙示録 (第1〜4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1〜3章、第2巻には4〜7章、第3巻には8〜15章、第4巻には16〜終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ — 私たちは主のもの

証しシリーズ (第1〜9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命 がんのうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の存在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ頼り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

Unser
HERR
lebt
主は生きておられる

主は生きておられる 第52号

定価100円（税込み）2019年11月15日発行

編集スタッフ 岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力
芳我幸雄 福留伸子 牧野正士
印刷・制作 ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン 飯守格太郎
発行所 キリスト集会
サイトマップ(キリスト集会のご案内) <http://christ-shukai.net/>

主は生きておられる
Unser HERR lebt